

博士論文の要旨および 論文審査結果の要旨

氏 名	藤 岡 毅
学 位 の 種 類	博士（比較文化学）
学 位 記 番 号	文博乙第2号
学位授与の日付	2009年3月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学 位 論 文 題 目	ルイセンコ主義はなぜ出現したか ——生物学の弁証法化の成果と挫折——
論 文 審 査 委 員	主査 松永俊男 教授 副査 巖 圭介 准教授 副査 国松夏紀 教授

<博士論文の要旨>

ルイセンコ主義はなぜ出現したか

——生物学の弁証法化の成果と挫折——

藤 岡 毅

わが国は、「ルイセンコ学説」をめぐる論争が最も激しく行われた国の一つである。「ルイセンコ学説」は、ソ連の農業技術者だったT. ルイセ

ンコが提唱した農業・生物学理論で、獲得形質の遺伝を基礎にし、生物を新しい環境に適応させることによって有益な新種を短期間に生み出すことができる」と説いた。リセンコは自らの見解を主張するだけでなく、遺伝子説に立脚する遺伝学を、「ブルジョア観念論」「反動的な理論」と攻撃した。特に、1948年8月に行われたソ連農業科学アカデミー総会において、リセンコ学説がソ連の農業・生物学の正統な理論であることが国家的に再確認され、遺伝学者は非難され、その多くが研究者としての地位を剥奪されるにいたった。

1948年を頂点に、リセンコ学説をめぐって、またソ連における遺伝学への抑圧をめぐって、世界中で議論が沸騰した。わが国では、戦後直後から八杉竜一や石井友幸を中心に、リセンコ学説の紹介が精力的に行われ、若い生物学者を中心にリセンコ学説が好意的に受け入れられていった。それは、当時の知識人の多くが抱いていた社会主義ソ連への憧れや西側の正統理論であるメンデル遺伝学が当時行き詰っているかに見えたことも加わって、リセンコの理論が新しい進歩的なものに若い生物学者や学生には思われたからである。だが、その後、分子遺伝学の発展に見られるような遺伝学の目覚ましい前進があり、ソ連でリセンコが失脚し、リセンコ学説の権威が地に落ちてしまうと、わが国のリセンコをめぐる議論が急速に減少し、ほとんど省みられなくなった。60年代後半になって、中村裡里は、日本のリセンコ論争を総括する優れた著作『リセンコ論争』を書いたが、この総括以降、リセンコをめぐるわが国の議論は完全に消滅してしまった。

しかし、欧米とソ連・ロシアでは、リセンコが失脚した後になっても、リセンコをめぐる議論は引き続き行われてきた。初期の議論は、ジョレス・メドヴェージェフの『リセンコ学説の興亡』に示されたように、リセンコとの闘争に参加した当事者による、リセンコおよびそれを支え

博士論文の要旨および論文審査結果の要旨

たイデオロギー（ルイセンコ主義）を弾劾する立場から行われた。それは、主として、批判の自由が多少とも戻ってきた60年代に、ソ連の遺伝学者およびその周辺の人々によって行われた。その後、ソ連国内での研究が困難になった時期には、D. ジョラフスキーやL. R. グレアムのような西側の科学史家によってルイセンコ主義の研究はすすめられた。この時期にあつては、ルイセンコ主義の原因をより客観的に、ソ連のおかれた政治・経済的、あるいは文化・思想的文脈から明らかにしようとする機運が生まれた。この時期には、R. レウオンティンのような西側のすぐれたマルクス主義的傾向の生物学者も議論に加わった。しかし、ルイセンコ主義の研究がその歴史的な文脈を解き明かすためには、資料が決定的に不足していたため研究の本格的前進は難しかった。

80年代後半のペレストロイカによる歴史の見直しとグラスノスチ（情報公開）の進展によって、新しい研究の地平は開かれた。その後、ソ連崩壊に続く一連の歴史的経過の中で、20年代、30年代のソ連史の研究が進み、ルイセンコ主義の思想的文脈を読み取ることが可能となった。特に、ロシアの科学史家、N. クレメンツォフとE. コルチンスキーは、新しい研究の方向を切り開いた。クレメンツォフは30年代、40年代にルイセンコがソ連の農業、生物学の領域で支配権を獲得する過程を分析し、戦後顕著に現れたスターリン主義科学体制を解き明かす礎石を築いた。コルチンスキーは、20年代に盛んに追求された生物学を弁証法的唯物論によって作りかえる試み（生物学の弁証法化）の全体像を明らかにした。この試みは、結局失敗に終わり、その挫折の中から立ち上がるために、I. I. プレゼントのような「生物学の弁証法家」を自認する人たちが、自分たちの活動の守護神を求めてルイセンコに近づいて行ったことが示された。このように現在のルイセンコ研究は、冷戦期のスターリン体制のイデオロギー政策を解き明かすことや、20年代の哲学および科学論争の意義を明らかにするなど、多様な

発展を見せている。

以上のベタリイセンコ研究の成果に立脚しながら、いくつかの視点を明確にし、新しく提起しようとするのが本学位論文の狙いである。その要点を以下に列挙しよう。

1. 20年代に展開された「生物学の弁証法化」は30年代のそれとは違って、生物学のそれぞれの分野で優れた実証的研究を行っている人たちが主体的に推し進めたものであり、彼らを含めた哲学論争の展開は、全体としては生産的であったというのが本稿の第1の主張である。ロシアのメンデル遺伝学の支持者はヨーロッパの遺伝学者とは違って、自然選択説とメンデル遺伝学を対立させることなく、むしろ獲得形質の遺伝を主張するラマルク主義者からの批判に耐えなければならなかった。彼らの批判は、遺伝学者は生物を現実の生活環境から切り離して遺伝子のような抽象的な仮想的概念に依拠しているというものである。管理された実験室のショウジョウバエに対する遺伝実験や遺伝子の数理統計的な分析が中心の欧米の遺伝学に対し、ソ連の遺伝学派は自然集団の遺伝的構造の分析を理論と結びつけた。こうした発想はラマルク主義者との激しい論争の中から生まれたといえるだろう。総合説の礎石を築いた Th. ドブジャンスキーは紛れもないソ連遺伝学派の一員であり、欧米の研究にソ連遺伝学派の手法を持ち込んだ。このようにソ連遺伝学派は、総合説の先駆者の役割を果たしたのであり、したがって20年代の哲学・遺伝学論争は生産的であったといえるだろう。

2. 20年代の「生物学の弁証法化」の運動は、自然科学の代表者とマルクス主義者の同盟を目指す運動と不可分に進んできたが、20年代末に始まった「文化革命」以降、非マルクス主義の自然科学者への排撃が強

められた。そして30年代初めのミーチン哲学の台頭によるデボーリン派の失脚と哲学および科学政策の転換によって、「生物学の弁証法化」の運動は変質したというのが本稿の第2の主張である。

「哲学と自然科学の党派性」をスローガンに哲学者 M. B. ミーチンが頭角をあらわしたが、彼の言う「党派性」は党の現今の政策に科学を従属させるという意味でしかない。ミーチン哲学が、党からお墨付きを得たことによって、ソ連の科学政策はますます実用主義的なものになった。科学は実用に役に立つときに始めて意味を持つ、という発言さえ党の指導部に現れた。客観的真理を明らかにする科学の役割は軽視された。後に、リュセンコ派が遺伝学者を非難する口実の1つにいつもあげたことは、遺伝学者たちは「無用のハエ」の研究をしているということである。ショウジョウバエは遺伝のメカニズムを研究する上で最も適した実験材料である、という遺伝学者の反論は理解されなかった。このような状況の下で、弁証法的唯物論はますます教条的なものとなった。それは実用主義的な動機を権威づけるレトリックにすぎなくなった。穀物の増産に役立つ奇跡的な農業技術を「発見」したという党の宣伝によって急速に注目を集めたリュセンコは、ハエの研究にいそしむ遺伝学者を「ブルジョア学者」と批判し、自分の「成果」を宣伝した。30年代を通じてリュセンコの地位が高まることを可能にした背景に、以上のような哲学および科学政策の実用主義的転換があったといえるだろう。

3. 37年から本格的に始まったスターリンの「大粛清」の時期に、リュセンコは急速に昇進していったが、彼の出世は、彼の理論が認められたからではない。「大粛清」によって多くの遺伝学者が弾圧され、命を落としたが、それも彼らが遺伝学を支持したからではない。遺伝学者

は外国の研究者との交流を通して国際的な結びつきを多く持っていたので、容易に外国のスパイとして摘発された。遺伝学者でなくても、たとえば Ia. ヤーコブレフのようにリュセンコの庇護者で遺伝学者を非難してきた人物でもスパイ容疑による銃殺を逃れなかった。外国に行き来したことのある人物は誰かれなく疑われた。日本とドイツという2つのファシズム国家に東西を挟まれていた当時のソ連国内の緊張状態がスパイ狩りのパニックを起こしたのである。リュセンコが本当に党と国家から信任を得たのは、1939年の遺伝学会議によってである。雑誌『マルクス主義の旗の下に』の主催で開かれたこの会議で、遺伝学者とリュセンコ派は1週間にわたって論争を行ったが、この雑誌の編集長であるミーチンによる結語で幕を閉じた。ミーチンは、N. I. ヴァヴィロフら遺伝学者たちを「外国の権威に無批判的」として非難する一方、リュセンコたちを「進歩的で革新的」と評した。このように、ミーチンの力によってリュセンコは正統派の地位についたのである。本稿はリュセンコ主義とミーチン哲学は、強い結びつきがあることを主張する。

4. 本稿は20年代の遺伝学論争の意義についてリュセンコ主義出現につながる流れとは別に、進化学史上の意義についても強調した。生物学の弁証法化を目指す生物学者の間で激しい論争となった遺伝学論争は、19世紀末に展開されたラマルク主義者とダーウィン主義者との論争の継続の意味を持っていた。19世紀末において、ダーウィニズムは自然選択説と獲得形質の遺伝の原理とを含む概念として理解されていた。20世紀初頭のメンデル遺伝学と自然選択説との対立は実験遺伝学者と数理生物学者との対立でもあったが、対立の克服過程で数理集団遺伝学が成立した。しかし、彼らの研究は、現実の自然の中の生物を研究

博士論文の要旨および論文審査結果の要旨

しているナチュラリストには受け入れられず、彼らの多くは依然としてラマルク主義の信奉者であった。目的論的な要素を放棄することでまだ生命力を保っていたラマルク主義と最新の遺伝学の知識によって補強されたダーウィン主義とがぶつかることは避けがたいことだった。そのような普遍的なぶつかり合いが、ソ連という特殊な条件下で生じたのである。だからこの論争はソ連内部で閉じていたのではない。たとえば、人工突然変異の誘導に成功した H. マラーの論文が *Science* に掲載されたことによって、論争での遺伝学者の立場は断然有利になった。20年代の遺伝学論争における遺伝学者たちの勝利は、獲得形質の遺伝の原理と自然選択説が結びついた旧来のダーウィニズムから遺伝学と自然選択説が結びついた新しいダーウィニズムへのパラダイム転換の一要素として位置付けることができるというのが本稿の主張の一つである。

5. 欧米やロシアでリセンコ問題についての研究が持続しているのに、リセンコが失脚して以降、日本ではなぜリセンコ問題に関する議論がまったく起こらなかったのかということについても本稿で分析と考察を行った。欧米では、1948年ソ連農業科学アカデミー 8 月総会で、遺伝学者が非難され、「リセンコ学説の勝利」が宣言されたことに対して、共産党員やそのシンパ層の中でリセンコ説や遺伝学者への弾圧をめぐって激しい論争が行われた。そこではリセンコ説やソ連指導部のリセンコ支持について反対であることと、マルクス主義者、共産主義者であることとは十分両立した。しかし、日本では8月総会以降、マルクス主義者、共産主義者であろうとしたものは、ほとんどリセンコを支持した。しかも、その中で、科学の党派性を強く主張する声さえあった。本稿では、戦後リセンコ主義が強く支持された

日本の思想的背景を、戦前の思想状況にまでさかのぼって若干の分析を試みた。わが国の左翼的知識人が1930年始めのミーチン主義の台頭によるソビエト哲学転換後のソ連の文献に多くの影響を受けていることが浮き彫りになった。

6. 最後に、ルイセンコ主義の問題を研究することの意義について述べた。その科学史的な意義において本稿が第1に注目するのは、ソ連社会主義という政治体制とイデオロギーが、一方で20年代ソ連遺伝学のような世界水準の科学を生み出すと同時に、ルイセンコ主義のような偽科学をももたらしたという事実である。科学史における「インターナルアプローチ」と「エクスターナルアプローチ」が互いに対立するものとしてではなく、相互に関連するものと見る科学史の新しいアプローチにとって、ルイセンコ研究は魅力のあるものとなるだろう。第2に、ルイセンコ研究が進むにつれ、ルイセンコ主義＝弁証法的唯物論の生物学、という図式が崩れていくが、このことはほとんど顧みられなくなった「弁証法的方法」というものの意義を再吟味する機会を我々に与えるだろう。第3に、極端な科学の実用主義的な理解が、科学を停滞させ、間違った方向に科学を導く危険性を持っていることの豊富な実例をルイセンコ研究は提供しているので、それは科学研究の分野に市場原理を導入することが強まっている現在の日本の状況に警鐘を鳴らすという点で重要な意義をもつだろう。

＜博士論文審査結果の要旨＞

ルイセンコ主義はなぜ出現したか

——生物学の弁証法化の成果と挫折——

審査委員 主査 松永俊男

審査委員 副査 巖 圭介

審査委員 副査 国松夏紀

スターリン時代のソ連では、農業技術者ルイセンコの唱えた農業・生物学理論が、マルクス主義に基づく正しい理論とみなされていた。今から見れば似非科学にすぎないルイセンコ学説がなぜ、もてはやされることになったのか。本論文はこの問題を考察したものである。

歴史的に重大な事件であったにもかかわらず、日本にはこの問題に取り組んだ研究がなかった。中村禎里『ルイセンコ論争』（1967）が唯一の研究書だが、同書は日本におけるルイセンコ学説の影響を論じたものであり、ソ連の状況については表面的な経過を紹介しているだけである。

一方、ロシア及び欧米では、ペレストロイカ以降、歴史文書の公開が進展し、科学史家によるルイセンコ問題の研究が活発になった。本論文はこうした先行研究を把握した上で、一次資料を検討し、独自の見解を提唱したものである。日本にはこの水準の研究がほかになく、意義のある論文といえよう。

ルイセンコ事件は、唯物弁証法と科学との結合が不毛であることを示しているとみなされることが多く、中村もそのように主張している。本論文の著者はこの通説を否定する。第一に、1920年代にソ連の遺伝学が優れた

成果を挙げていたことを指摘し、生物集団に注目した欧米には見られない研究は、生物学の弁証法化を目指す努力から生まれたと主張する。本論文の第1章と第4章でこの問題を扱っている。

これとは逆に、ルイセンコ学説を正当化したミーチンの哲学は、スターリンの御用哲学であって、ミーチン哲学によるお墨付きは唯物弁証法との関係を示すものではないと主張する。本論文の第2章と第3章でこの問題を扱っている。

このようにルイセンコ事件と唯物弁証法との関わりを検討することが、本論文の主たる課題となっている。著者は、ルイセンコ登場の最大の要因はミーチン哲学であったと見ているが、これはいままでの研究にはなかった独自の観点である。

さらに論文の内容を順次、検討してみたい。本論文は5章から成っている。第1章は、1920年代のソ連の遺伝学について論じている。

第2章では、プロレタリア文化の優位性を強調する文化革命が1920年代末に始まり、その中でミーチン哲学が台頭し、遺伝学の地位が揺れ動いた過程を追跡している。1929年4月に開催された会議で、メンデル遺伝学を否定する機械論的ラマルク主義者と遺伝学者とが論争したが、哲学者デボーリンによって機械論者には「修正主義者」のレッテルが貼られ、メンデル遺伝学がソ連における公的な地位を獲得した。著者はこの会議の状況を詳細に分析し、遺伝学が勝利したものの、哲学者が科学的真理を判定するという悪しき前例となったと指摘している。この年、1929年の11月には文化革命をリードしたブハーリンが失脚し、スターリンが最大の理論家とみなされるようになった。著者は、1930年に若手の哲学者ミーチンが、哲学と科学は政治に従属すべきであると主張してスターリンに注目され、1931年1月までにデボーリンに代わってミーチンの哲学が正統的な哲学となる過程を追跡している。

第3章では、1930年代にリイセンコが台頭する過程を分析している。1932年の夏に文化革命が終ると、それまで生物学の弁証法化の専門家として活躍していたプレゼントが、リイセンコと組むことによって地位の確保を目指した。プレゼントはリイセンコを生物学と農学の革命者として宣伝した。1937年から本格的になった大粛清の時代には、遺伝学者たちをスパイとして排除することに成功した。大粛清が終わった1939年10月に開催された会議で、リイセンコ派と遺伝学者が討論し、学術的には遺伝学者が勝利していたが、判定をゆだねられたミーチンがリイセンコ派に軍配を挙げた。ミーチンは、農業生産を短時間で増大させるというリイセンコ派の自己宣伝を鵜呑みにしていた、と著者は指摘する。

第4章は、再び、1920年代のソ連の遺伝学の独自性を論じているが、論文の流れからいえば、第1章の一つの節として構成すべきであったろう。

第5章では、1948年8月の農業アカデミー総会でリイセンコ派が最終的な勝利を手にした経過を分析し、これはスターリンの強い意向によるものであり、スターリンはリイセンコが正しいと本気で信じていたと指摘している。さらにこの章では、欧米と日本におけるリイセンコの影響を比較し、最後に、実用性を性急に求める現在の日本の科学技術政策に警鐘を鳴らしている。

本論文はロシア語及び英語の一次資料・二次資料を読みこなし、独自の立場からリイセンコ問題を考察したものとして高く評価できる。

ただし難をいえば、二次資料の紹介が詳しすぎる。その反面、リイセンコの学説について、ほとんど説明がない。これについては日本語の文献もあり、改めて述べる必要がないと考えたからであろうが、一通りの記述は必要であろう。また、ロシア文字がローマ文字に翻字されているが、学位論文としてはロシア文字のままにすべきであろう。

こうした問題があるのもせよ、本論文はリイセンコ事件に関する日本で

最初の本格的な論考であり、今後の研究の土台となるものである。

本論文は博士論文としての価値を十分に有することに、3人の審査委員の見解が一致した。